

拓く通信



人恋しさが未来を拓く

理事会長メッセージ③ 社会福祉法人拓く 理事長 馬場 篤子

「鬱」「リストラ」といった社会問題のない1980年代に、無認可作業所を多くの人と助け合って立ち上げました。資金集めのたこやきバザー、赤ちゃんや障がい児を連れての遠方研修など、教員や保護者同士、知人と助け合わなければ一步も進まないという空気感。常に人との温もり、関わりを求めていた私たちにとって、「人恋しさ」などは眼中になく、「人と人との絆」が財産になっていきました。

しかし、2010年頃から障害サービス事業は制度が細かく区分され、事業監査による管理も強まったことで、利用者ではなく制度に沿って仕事しがちに。保護者と職員はサービスを受ける人と提供する人という関係性になり、お互いに距離が生まれ孤独な状況に陥ったように思います。実際、この10年で介護サービス事業所は増えても虐待や介護殺人が後を絶ちません。人々のエネルギーが内へ内へと向かうばかりで息苦しく、不安の強い閉塞感を覚えます。

コンビニやITなどが発展し利便性が高い今の時代、「人恋しさ」はもう死語かと思ったのですが、国のモデル事業を進める中で、若い皆さんこそ、手触り感のあるコミュニティを求めている、的確ではないかもしれません。「人恋しさ」を切に求めているのではと感じ、「人恋しさを起点とすれば、何か好循環が生まれるのでは」と考え始めました。

その答えは「佐渡旅行」にありました。おばあちゃんが運転する軽トラが脱輪して困っておられたので、「手伝ってください」と行き交う人に呼びかけ、皆で知恵と力を出し合い、「よいしょ！」と幾度も声を合わせて、ついに引き上げたのです。何とも言えない幸せ感に包まれ、無認可作業所を開設した時の空気感を思い起こしました。「行き交う人に呼びかける」「知恵と力を出し合う」「お互いに応援し合う」こと。この空気感を地域に創っていくことで、閉塞状況をブレイクスルー（突破）し、未来を拓いていきたいと思います。

(写真) 佐渡旅行 4~5頁に掲載

CONTENTS

- | | |
|---|------|
| ●特集 2018年度 厚生労働省のモデル事業 2年目に取り組みました！新しいコミュニティのプラットフォームづくりへ | …2・3 |
| ●市民の皆さんを誘って佐渡旅行を実施しました | …4・5 |
| ●「くるめ楽衆国まつり」にチャレンジ！ | …6 |
| ●2018年度事業のご報告 | …7 |
| ●10月27日開催！第18回ポレポレ祭り | …8 |



2018年度 厚生労働省のモデル事業 2年目に取り組みました！ 新しいコミュニティのプラットフォームづくりへ

当法人は18年度も国のモデル事業を受託し、8プロジェクトを実践しました。
「障がい者も老若男女も、誰もが未来を創る担い手」を掲げて久留米コンソーシアムを拡大し、プロジェクト全体で1000人余が参画。領域や価値観の壁を越えて、地域で混ざり合う。それが、私たちの考える「ローカルログイン」！新しいコミュニティが次々に生まれています。

「久留米10万人女子会～出逢い、繋がる～」を開催（2019年3月・両替町公園）

関心縁 × 課題縁 異文化 × 異世代

人間関係が希薄になった現代、ツイッターやFacebookなどのSNSでつながっていても、孤独を感じる若者が増えていると言われています。しかし、1年目の実践を通して、心の奥底では「誰かと一緒に何かしたい」「誰かに本気で怒ってもらいたい」など、心の通う交わりを求めていました。そこで2年目は、若者も包み込むような新しいコミュニティのプラットフォームづくりへ。若い世代を中心に事務局体制を整え、「隣人」を意識してまちへ飛び出しました。それは周りにいる人、遠く離れた地にいてもつながっていたい人を心に留めて、異文化・異分野・異世代の人同士を掛け合わせること。

まず、実践したのは、「関心縁と課題縁」の掛け合

せです。「久留米10万人女子会We Lab 46」プロジェクトでは、各メンバーが自分の小学校区で月1回、暮らしについて考える女子会「ラボ会」を開催。彼女らの関心事を入口にして地域にログインし、子育てなど互いの話に耳を傾けながら、一緒に課題を考え取り組みを実施。現在46校区のうち25校区で「ラボ会」が誕生しています。次に「異文化・異世代」の掛け合わせ。「世代力発DEN所 みやの人」プロジェクトは、社会医療法人と不登校の学生の支援を行うNPO法人、地域住民が結集し、耕作放棄地を開墾しての野菜農園づくりなどを実施。業種や年齢の枠を超えてコミュニティの絆が強まり、学生が社会医療法人系列施設での就労につながりました。

⑧プロジェクト紹介

地域密着型子ども・大人センター

全校区

赤ちゃんから大人まで切れ目なく地域とつながる仕組みづくりをしようと「本業+α」という地域資源の発掘。「西原糸店・未来学舎・半田アパート・SORA」の4つの拠点の「α」の部分をパンフレットによって「見える化」を行った。(3頁写真参照)

世代力発DEN所 みやの人

宮ノ陣小校区

「世代力発DEN所 みやの人」を結成し定例会を開催。野菜農園づくり、河川敷でピクニック(デイサービスに通う高齢者、不登校の学生が参加)、地域のデイサービス主催の餅つき、防災マップづくりに向けた意見交換会などを実施した。(3頁写真参照)

6000人みんなが顔見しりの町 長門石

長門石小校区

地域活動に関わっていた住民、あまり関わっていなかった住民も合わせて約10名がコアメンバーとなり、食事会やお月見会、ユルスポーツなど、顔見知りになるキッカケづくりを実施。

異文化力発電所

全校区

久留米市在住のケニア人・マラウイ人、安武地区の農業実習生(ベトナム人)、ミュージシャン、安武町の子育て世代の人、48歳の同窓生、そして福祉人材の掛け合わせで「ケニアフェア」を開催。

✿ 久留米コンソーシアムって?

コンソーシアムとは共同事業体。テーマを掲げて企業や団体、行政など、様々な分野や領域を超えた人々が集まって議論をし、地域づくりを実践する。18年度のメンバーは、久留米市行政、まちづくり振興会関係者、社会的事業の実践者、福祉事業者、医療事業者、大学教授などの有識者、厚生労働省、会計・法律の専門家、ソーシャルインパクト評価やSIBの導入・運用実績を有する専門家、そして、ゲストとして東近江市や岡山市の職員、一般社団法人日本老年学的評価研究機構の方々なども参加した。



久留米コンソーシアムの事前視察(NPO法人未来学舎にて)



参加者 民間×行政×厚労省×研究者 延べ300人
1回のコンソーシアム参加者 50~80人

世代力発DEN所 みやの人

宮ノ陣でフリースクールを運営するNPO法人と、私達、医療・介護を提供する社会医療法人が農業を通じて出会いました。これから、地域を賑やかにしていきます。



地域密着型 子ども・大人センター

4つの拠点のパンフレットを作成。本業を真ん中に、「α」の機能を掲載。



地域密着型子ども・大人センターを提起

そして、本業と「α」の掛け合わせ。近年、市内で美容業や飲食業などを営む方が本業の他に、「α」として子育てや悩みの相談、研修の場を設け、病気などで自信を無くしている人の就労の後押しもされています。このような場が地域に点在すれば、孤立しがちな人たちが気軽に立ち寄り、「ここなら気持ちを分かってもらえる」「お互いにやりたい事を応援しよう」というきっかけが芽生え、小さくても新たなコミュニティが育まれていきます。そこで、多機能な店や企業をつなぐ新しい仕組みとして「地域密着型子ども・大人センター」を提起。19年度では久

留米コンソーシアムの中核として位置づけています。

モデル事業2年目を終えて、市内の各所に「新しいコミュニティ」が次々と生まれています。これらが成長して果実になり、種を落として、今までになかったコミュニティの誕生という好循環へ、私たちの夢は膨らむばかりです。そして、3年目となる19年度は、久留米市行政と社会福祉協議会の方々が加わることで事務局体制を強化。さらに多くの「隣人」に呼びかけながら共感者を増やし、市内の隅々にまで「ローカルログイン」の輪を広げていきたいと思います。

久留米10万人女子会

全校区 繼続事業

DV支援者や多胎児支援団体等に呼び掛け、実行委員会を結成。各小学校区25校区で、毎月ラボ会を開催(6回開催)。自分たちの住む校区で目指す地域の在り方を言葉にして旗も作成。「久留米10万人女子会イベント」「合同ラボ会」プレを含めて2回実施。

輪をつくろう

江南中校区・城南中校区 繼続事業

親子おやつづくり、スポーツ教室、芋掘り、江南フェスタ出店、マップ更新配布。おしゃべり定例会を開催し、お互いを知り合いながら、自分の生まれ育ったまちの中で様々な体験をしようと、「みんなと一緒に楽しく暮らしていきたい」を形に話合い続行中。

もう一つの家

安武小校区・御井小校区 繼続事業

福祉の専門家ではないボランティアで、知的障がい者だけではなく、重度心身障がい者も対象に「土日里親」を実施。身体的な介護が必要でも共存できるように、バワースーツを購入するなど誰もが介護しやすいように工夫した。

ほんによかね会

安武小校区 繼続事業

農産物直売所や地域食堂、無料タクシーの運営。レジは17年度のモデル事業に関わった子育て世代が交代で担った。久留米市行政が3つの補助・委託事業(生活困窮者支援、障害者福祉、介護保険)として地域食堂の活動を後押しするようになった。



佐渡旅行報告



市民の皆さんを誘って、佐渡旅行を実施しました。 助け合い、支え合い、 まるで「大家族」のような旅になりました。

5月と7月、当法人の活動として実施した佐渡旅行は、利用者の皆さんと職員、それぞれの家族、知人など、毎回約40名が参加。地域の中で誰もが混ざり合って暮らそうと、プラットフォームづくりを実践していることから、今回より旅行の形態も変更。目指したのは「他人が混ざり合った大家族」です。

寄稿

今回の旅行に参加された3名の皆さんより、寄稿いただきました。

「あなたは一人じゃない」。そう言ってもらえた。

佐渡市 副市長 藤木 則夫

東日本大震災の復興支援の仕事を東北で担っていた頃、馬場さん(現・法人理事長)始め久留米の大勢の人達が、何度も何度も手を差し伸べに東北を訪ねてくれました。原発事故により避難を余儀なくされ、別の学校の体育館を教室としていた福島県南相馬の小学生を、馬場さん達と訪れたことがあります。小学生が集まって、先生の弾くギターに合わせて歌をうたってくれました。その中に、「『あなたは一人じゃない』と、そう言ってもらえた。それだけで、僕たちは歩き出せる」という歌詞がありました。聴きながら涙が止まらなかったことを覚えています。

人間の一番強い欲望は、集団欲。人と繋がってみたいという欲望だと言われています。東北の被災地でも、何もかも失ってしまったけれど、「孤独が一番つらい」と

いう声をよく聞きました。旅というのは、日頃見えにくくなっている関係性を再発見することが目的かも知れません。誰でもが持っている、愛されたい。褒められたい。役に立ちたい。認められたい。理解して欲しいという気持ちを、異空間、新しい出逢いの中で再確認して、次のステップに歩み始めるのが、旅なのかも知れません。

今回、たくさんの久留米の人達に佐渡を訪ねていただき、自然、歴史文化、そして佐渡の人とその生活の営みに触れていただきました。その一つひとつの出逢いや関わりの中で、心が引きつけられるものや気持ちの良さ、驚き、珍しさを感じていただくものがあったとしたら、それは、久留米の皆さんと佐渡の人達の間に新たな縁が結ばれたものと思い、素晴らしいことと思っています。

突然、混じってしまって。

67歳の地域のおっちゃん 古賀 信之

突然の誘いでした。「佐渡に行こう、障がい者の家族旅行らしい。車椅子くらい押せるだろう?」と。それで決まりです。佐渡の旅はすばらしい3日間でした。天気は快晴、藍色に染まるベタ凪の日本海、圧倒されてしまいます。朱鷺も飛んでいます。

さて、今回の旅を振り返ってみます。障がい者のひと家族だけでの旅行の難しさは想像できます。どうしても障がい者を庇おうとして防御的になってしまい。観光どころではなくなってしまう。旅行は本来、意識を外に向けることによって楽しむものでしょう。そこで、数家族のグループで出かける。吾が子も他所の子も面倒見合う。助け合うことがゆとりを生む。今回の旅行はそうでした。

そしてです。地域のおっちゃん、おば



「他人が混ざった大家族」という形態でなら、もっと「何か」ができる！

社会福祉法人拓く 統括本部長 北岡 さとみ

久留米を朝5時30分に出発し、バスや飛行機、船など何度も乗り換え、13時頃ようやく佐渡の港に到着。この長旅が、「大家族」の始まりでした。それから2泊3日、利用者の皆さんと職員、それぞれの家族、地域や他団体の方など1歳から84歳までの人たちで寝食を共にしました。ルールは、ただ一つ「声を掛け合って助け合うこと」。

移動が大変なのは、障がい者だけではありません。子どもも高齢者も時には助けが必要で、進むスピードも異なります。しかし、障がいがあっても友人の手を取って一緒に歩いたり、子どもたちの世話をしたり、荷物を持ったり、車椅子を押したりとできることはたくさんあります。旅行中は、誰もが家族のように当たり前に声を掛け合い、誰もが一役を担っていました。そして、子どもたちは場の

雰囲気を和ませ、周りの人の笑顔をたくさん生みだしていました。勿論、時にはパニックになったり、誰かが大泣きしたり、物を失くしたりというドラマはいろいろありましたが、その度にみんなで共有し、管理的ではなく、全員が「家族の一員」としての時間をありのままに過ごしたように思います。それは、異世代・異業種のいろいろな人が集まつたからこそ、誰も排除しない大家族というような空気感をみんなで作ることになり、誰にとっても安心して過ごせる場になったのでしょう。

佐渡と久留米。距離はありましたけど、心地よい疲れとともに、この「他人が混ざった大家族」という形態でなら、もっと「何か」ができそうな気がすると、胸を弾ませながら久留米に帰ってきました。

佐渡市の皆さん！

事前打ち合わせ、旅行中の手伝い、港でのお出迎え、お見送りなどたくさんのおもてなしを有難うございました。

旅行会社、佐渡市の行政・障がい者施設の関係者、佐渡汽船、旅館、観光地と密に連絡を取り、現地の情報を入れながら、旅行プランを組みました。



あらためて感動した絆の強さ

(一社)ほんによかね会 地域食堂部 部長

三原 圭子 (久留米市安武町)

胃がんで1月に胃を全摘、ご飯も水分も取れず、体力は全くなく、真っ直ぐ歩けないという状態。旅行の途中で皆さんにご迷惑をかけるのではと心配しながらの出発でした。でも、障がいを持った方と親御さん、ベテランの職員や頼りになる地域の皆さんと一緒に。何とかなるだろう、そんな気持ちで、一度は行ってみたかった「草木もなびく 佐渡ヶ島」へ。

現地は天候にも恵まれ、自分の体調などすっかり忘れて、観光、太鼓を叩いたり砂金を探したりと夢中になりました。そしたら宴会の時に、お酒少しご飯が食べられたのです。自分でもびっくりでした。長い間、ボレボレの利用者さんと関わって理解してきたつもりでしたが、今回の旅行で、改めて家族同士の繋がりの強さ、何をするにも皆すぐに手を

差し伸べて楽しさを分かち合う姿に感動。それは長年、ボレボレ倶楽部の活動などを経て、強い支え合いの絆が深まっているからだと分かりました。

また、佐渡市の藤木副市長、障がい者施設、行政職員の皆さんのお出迎えから見送りまでの心遣いにも感服。これが本当のおもてなしの心だと感動し、私も見習う点ばかりで、久留米でも今後、「おもてなしをもっとしなくては」と目標もできました。一緒に過ごした3日間、「同じ釜の飯を食う」とは、こんなことなのでしょうか。多くの人に気遣いをいただき、本当にすばらしい旅となりました。

お陰様で、旅行を機に、ふさぎ込んでいた気持ちが晴れ「何でもやればできる」という自信ができました。佐渡旅行は間違いなく、私に命を吹き込んでくれました。

(久留米市大石町)

ちゃんがこの団体に加わることの意味です。これがある種の効果を生み出しているように感じました。介助者であり観光客であり第三者でもあるという、曖昧な存在が居ることでグループの防御的姿勢を緩めているように思えたのです。グループの内側に向いがちな視線を外に向け直し、防御的姿勢を溶かしているような、そんな気がしました。つまり、観光をしましょうよと促しているようなのです。私は車椅子を押すことだけを期待された訳ではなかったようなのです。要は混ざっていることなのではないかと。

最後に、職員の方の事前の手配、移動計画の緻密さは特筆されるべきものでした。全く滞りなく旅することができました。素晴らしい、大変だったでしょう。お陰で楽しい旅となりました。

人恋しさが未来を拓く



実践報告



4月、「くるめ楽衆国まつり」にチャレンジ!

4月29日、「第4回くるめ楽衆国まつり」が中心市街地で開催。

久留米商工会議所や市、団体などで構成する「オール久留米で盛り上げ隊実行委員会」が主催し、当法人は実行委員として展示とバザーなどに参画しました。

当法人は、「くるめ楽衆国まつり」に初参加。実行委員として参画しましたので戸惑うことばかりでした。しかし、「あふりかじょんぐる」などの小さなコミュニティから大きな組織の久留米商工会議所まで、多くの方々と出会い、「掛け合わせ」ができればと考えてチャレンジ。残念ながら皆さんと十分な打合せの時間が取れず、「混ざり合う」

までは至りませんでしたが、知り合いになったことで次に再会した時の掛け合わせに希望が膨らみました。また、全国的に展開されている「ストリートラクビー」や「KIMONOプロジェクト」と出会い、当法人と同様に「グローバル」×「ローカル」×「まちづくり」という視点を持っている団体や人が次々に増えていると心強く思いました。

ケニア・カサフスタン展

26年前夫がケニアにて仕事をしていた関係で、お土産として持ち帰った品も展示。ケニア出身のベティさんが民族衣装を身につけ、笑顔で「JAMBO」と声をかけながら、一枚の布が洋服になりショールになると、頭に壺をのせて実演。あちこちで会話が生まれ、おおらかで逞しい女性の姿を伝えてくれました。(浦川典子)



ケニア料理&カサフスタン料理の販売

昨年のボレボレ祭りからつながりができるローレンス氏よりケニア料理の「サモサ」「ピラウライス」を、札幌在住のかサフスタン人のダウレンジ夫婦からカサフスタンの家庭料理「マンティ」を教わり、利用者の皆さんが楽しんで手作りしました。新しいイベントに参加することで、多くの方との出会いがあり、新しいつながりが広がっています。(野上真紀子)



アフリカの躍動をステージへ

あふりかじょんぐる

アフリカンミュージックライブ、アフリカのリズムを披露。あいにくの雨で、観客は少ながつたのですが、感動しました。



ヒミコ

アフリカ・ケニア出身シンガーによるライブ



「楽衆国まつり」で出会った皆さんです!

あふりかじょんぐる、ローレンス、ヒミコ×久留米商工会議所×くるめ曜市×ストリートラグビーinkurume×オリパラ関係の市行政×久留米シティプラザ×(-社)イマジンワンワールド×アールグレイ×社会福祉法人拓く



2018年度 事業のご報告

2018年度(2018年4月1日から2019年3月31日)における当法人の事業についてご報告します。
POLE POLE

人と自分の力、出会いと掛け合わせの力を信じて!

社会福祉法人拓く 本部長 浦川 直人

法人設立から約20年が経ち、「入所施設はつくらない」という目的で開所したグループホームは、いつの間にか日中活動の事業所との往復で地域の人とあまり接することがなく、職員が対応する入所施設に近い姿になっています。そこで、「グループホームは土日稼働しない」と2年前に宣言。どうにか突破口を開こうと、2018年度は「もう一つの家」「土曜日里親」事業を試行。また、保護者会であり触れてこなかった親亡き後の問題も勉強会形式で話し合いを重ねてきました。そして今、どんな状態になっても利用者さんを受け入れる「365日体制」が、保護者の高齢化によって痛切な願いとして求められる中、当法人の理念である「混ざり合い共に生きる」を貫くためにも「入所施設にしてはいけない」という2つの思いの狭間で葛藤し続けています。



そんな中、2年前から当法人が代表として展開している厚労省のモデル事業。前のめりにドキドキワクワクしながら取り組むことで多様な主体が次々に生まれ、コトが進んでいく姿を見ていると力が湧いてきます。この活動を通して学んだことは、常に「自分たちで完結しないこと」「様々な人たちとまずは出会うこと」。人と自分の力、出会いと掛け合わせの力を心から信じ、一緒に何かをすることで、見識や視野、意識、基準が変化し、また一步前に進めるのではと考えています。

2019年度は、「くるめ楽衆国まつり」の参画から始まり、「佐渡旅行」、厚労省モデル事業プロジェクトコンソーシアムの有志の方々と一緒に取り組む「宿泊体験+つながりづくり事業」「ポレポレ祭り」など、新たな出会いと掛け合わせによるチャレンジを続けていきたいと思います。



■2018年度 事業活動内訳表

(単位:円)

勘定科目		決算
サービス活動増減の部	収益	障害福祉サービス等事業収益 326,360,920
	収益	その他の事業収入 25,316,629
	経常経費寄附金収益	3,600,000
	サービス活動収益計①	355,277,549
	費用	人件費 220,828,746
	費用	事業費 27,316,463
	費用	事務費 39,695,948
	費用	減価償却費 38,969,027
	費用	国庫補助金等特別積立取崩額 -5,310,304
	サービス活動費用計②	321,499,880
就労	就労	就労支援(A型・B型)事業収益 58,268,076
	就労	就労支援(A型・B型)事業費用 59,819,737
	就労	就労支援事業増減差額③ -1,551,661
	サービス活動増減差額④=①-②+③	32,226,008
サービス活動外	収益	受取利息配当金収益 15,457
	収益	雑収益(職員からの給食代金) 3,027,274
	収益	サービス活動外収益計⑤ 3,042,731
	費用	支払利息 0
	費用	サービス活動外費用計⑥ 0
	サービス活動外増減差額⑦=⑤-⑥	3,042,731
	経常増減差額⑧=④+⑦	35,268,739

勘定科目		決算
特別増減の部	収益	施設整備等補助金収益 500,000
	収益	固定資産売却益 0
	収益	事業区分間繰入金収益
	収益	サービス区分間繰入金収益
	費用	特別収益計⑨ 500,000
	費用	固定資産売却損・処分損 6,005,799
	費用	国庫補助金特別積立金取崩額(除) -364,584
	費用	国庫補助金等特別積立額 500,000
	費用	事業区分間繰入金費用
	費用	サービス区分間繰入金費用
繰越活動増減の部	費用	特別費用計⑩ 6,141,215
	費用	特別増減差額⑪=⑨-⑩ -5,641,215
	差額	当期活動増減差額⑫=⑧+⑪ 29,627,524
	差額	前期繰越活動増減差額⑬ 350,957,695
	差額	当期末繰越活動増減差額⑭=⑫+⑬ 380,585,219
差額の部	基金	基本金取崩額⑮ 0
	基金	その他の積立金取崩額⑯ 0
	基金	その他の積立金積立額⑰ 70,000,000
	基金	次期繰越活動増減差額⑱=⑭+⑮+⑯-⑰ 310,585,219

※「貸借対照表」「資金収支計算書」については、社会福祉法人の財務諸表等電子開示システムをご覧ください。

2019年10月号(年2回発行)

発行・社会福祉法人拓く 法人本部

〒833-0-0071 福岡県久留米市安武町武島468-12

TEL 0942-27-2039

TEL 0942-27-2039

ちがいが生まれるパブリ

拓くウェブサイト
QRコード

活動を更新中!



くるつぱる
くるつぱる
久留米市イメージキャラクター

第18回 ポレポレ祭り

ワクワク・ドキドキ・ブレイクスルー

東北・熊本からも出店
※当地グルメと物産を販売



違いは魅力
違いは素晴らしい
違いが笑顔をつくる
たくさんの違いと出逢いたい
そんな想いのつまつた
お祭りです。

2019年
10月27日日

9:45~15:00

会場 出会いの場ポレポレ

もぐもぐ
ランド

多国籍料理から
定番のお祭りメニューまで
20店舗以上が出店し
お祭りを盛り上げます

わくわく
ランド

食器、日用雑貨、衣類、
おもちゃなど2000点以上
今年も乞うご期待!

きらきら
ランド

オリバラを感じ上げる
アフリカンミュージック、
お笑いコーナー、
会場みんなで参加できる
イベントなど盛りだくさん

**lucky
COMPLEX**

はっぴー[★]
ランド

団まわしや参加型ダンスなど
子どもが楽しめるイベントが
盛りだくさん!!
ケニア交流もあるよ!



今年のテーマは「ワクワク・ドキドキ・ブレイクスルー」です。「ブレイクスルー」とは、難関や閉塞状況を突破するという意味です。祭り実行委員や来場者の皆さんには、年齢・業種・個性・言葉・文化・テンションなどそれぞれ違います。「違い」がある私たちだからこそ、会場で出会い、「一緒に見る・話す・聞く・活動する」ことで、互いの魅力に気づき、重なり合って明日からのパワーが生まれるのだと思います。そこで、当日は、「ラッキーコンプレックス」というイベントも

設け、逆転発想を楽しんでいただきます。

今回も、東北・熊本の被災地、そして佐渡の皆さん総勢20名以上が、ご当地グルメと物産を携えて出店参加。2020年東京オリンピック・パラリンピックの事前キャンプ地の久留米を盛り上げようと「ケニア・カザフスタンフェア」も開催します。地域を超えて国を超えて、そして、自分の枠を超えて「ブレイクスルー」。たくさんの「違い」と出会ってください。ご来場をお待ちしております。